

あびこの文化

発行人 大洋
美崎 大洋
我孫子市 高野山
250-23
04(7182)
0861

美手連のデジタル教材づくりに参加

文部科学省では、2024年度の教科書改訂を契機として、デジタル教科書の本格導入を目指しています。そして2022年、そのための実証実験として、全国の小中学校を対象としたデジタル教科書の無料配布が始まりました。今後、デジタル教科書の重要性は日に日に高まり、紙の教科書を超えてメイン教材となる日も遠くありません。そのため、学校側でもデジタル教科書導入へ向けた早急な態勢づくりが求められます。

2024年度から全ての小中学校等を対象に、小学校5年生から中学校3年生に対して英語のデジタル教科書を提供

次に導入する算数・数学やその他の教科については、学校現場の環境整備や活用状況等を踏まえながら段階的に提供

国の教科書デジタル化方針を受けて、昨年度、美手連(美しい手賀沼を愛する市民の連合会)では構成団体に對しデジタル教材づくりに参加する団体を募集(後掲「趣意書」参照)、当会も「手賀沼に集った文化人」というテーマでデジタル教材づくりに参加した。

「デジタル」という言葉から、デジタル教科書は動画や音声、アニメーションなどのコンテンツ(中身・情報の内容)を含むものと考えられがちだが、これらは文部科学省の要件には含まれないため、デジタル教科書の必須項目ではない。反対に、教科書の内容が伴っておらず、学習を補助する動画や音声のみが含まれたもの場合は、デジタル教科書ではなく「デジタル教材」と呼ばれる。似た名称だが異なるものを指しているため、使い分けには注意が必要だ。両者の違いを改めて記述すると次のようになる。

・デジタル教科書…紙の教科書の内容の全部をそのまま記録した電磁的記録である教材(電磁的記録に記録することに伴って変更が必要となる内容を除く)
・デジタル教材…前記教科書での学習をサポートする副読本

デジタル教材は「参考書」に近い位置付けといえる。教育現場において中心的な教材として使われるのは教科書だが、教材はそれを適切に補助する。教科書だけではわかりにくい、伝わりにくい箇所も、デジタル教材があればスムーズに解決できる、という意味ではデジタル教材の役割は大きいといえる。

各教科書会社から出ているデジタル教科書には、プラスアルファとして動画や音声、アニメーションなどのデジタル教材が多く紐付けられている。また、今後導入が進んでいく中で、さらに多種多様なデジタル教材と紐付けされていくことが予想される。

構成団体の作品と当会の取り組み

グローブで夢と勇気を —大谷選手からのグローブ届く 「野球しようぜ!!」—千葉県我孫子市

アメリカメジャーリーグで活躍する大谷翔平選手が全国の小学校に寄贈したグローブが、我孫子市内にも届きました。

市立第一小学校では1月9日、3学期の始業式に合わせて届いたグローブのお披露目式を開催。グローブに同封されていた大谷選手からの「グローブが次の世代に夢を与え、勇気づけるためのシンボルになることを望んでいます」といったメッセージが榊原校長から読み上げられ、最後に「野球しようぜ。」が読まれると児童たちからは歓声があがりました。

その後、児童たちがグローブを箱から取り出し、その感触を楽しみました。実際にグローブを手にした児童らは「大谷選手からもらったグローブをつけられてうれしい」、



「WBC で活躍していたすごい人が一瞬にも寄贈してくれてびっくりした」と、興奮した様子で驚きと喜びの表情を見せました。



作品のナレーションは川村学園大学の大学生・石坂向日葵さんが担当した。作品は1月の役員会で一部披露したが、現在、9割がたが完成している。

既に美手連を構成するいくつかの団体が次に挙げのような作品を完成させている。

「手賀沼をうつくしくせつけん物語」(我孫子市消費者の会「手賀沼むかしものがたり」流山市博物館友の会「船戸の森のおはなし」船戸の森の会)「デジタル紙芝居スズメさんの見聞記(我孫子野鳥を守る会「手賀沼流域のこまつた水」美手連「デジタル運営事務局」等

当会が取り組んだデジタル教材「手賀沼に集った文化人」は我孫子市の社会科副読本「わたしたちの我孫子」でも取り上げている我孫子ゆかりの文化人の中から嘉納治五郎、血脇守之助、杉村楚人冠、柳宗悦、志賀直哉、武者小路実篤の6人を取り上げ、それぞれの「子供のころの様子」や「我孫子との関係」などについて小学生向けに編集している。

作成に際しては、我孫子市教育委員会、我孫子第一小学校、川村学園大学の協力・支援も得ながら進めた。美手連のプロジェクトチームのメンバーにはその都度貴重なアドバイ

(参考)

「豊かな手賀沼をめざすデジタル教材づくり事業」趣意書

美しい手賀沼を愛する市民の連合会

1. 目的

当会では、手賀沼が真の里沼であってほしいと願っています。次世代を育てる環境教育の一環として、当会の構成団体が持つ情報や調査研究成果を結集し、手賀沼の生態系や自然観察、地域の歴史など、様々な情報を動画など使いやすい形で提供し、授業での活用の一助としたいと考えています。

この事業のおもな対象は小学生とします。まずは、手賀沼を知って、次に手賀沼に来て体験してもらいます。子どもたちに、手賀沼に親しみを持つ心を育みたいと思います。(以下略)

2. 事業概要

(1)事業の実施場所 手賀沼及びその周辺地域(2)事業内容 当会の構成団体の活動成果である手賀沼・流域の動植物の生態や文化・歴史などを分かりやすく可視化して、デジタル教材(動画等)を制作し、授業の中で活用してもらいます(3)「デジタル教材」とはどういうものか?(省略)(4)実施の手順(省略)

(以上「趣意書」の一部を転載)

~~~~~

## 「美しい手賀沼を愛する市民の連合会」略称(美手連)の活動に参加して(第8報)

牧田 宏恭(会員)  
ひろゆき

会報「あびこの文化」に連載の本報告は、前第197号(本年1月1日発行)に続いて、今号が8回目となる。前号の主な報告内容を振り返ると…

①昨年12月実施の「手賀沼統一クリーンデー」内容報告  
②手賀沼船上調査(数年毎)「手賀沼全域の「ナガエルノゲイトウ」、「オオバナミズキンバイ」などの外来水生

植物や、「マコモ」、「ヒメガマ」、「ヨシ」などの水生植物の分布域・繁茂状況の観察」の船上からの観察報告

③「手賀沼遊歩道周辺に見られる廃棄船・放置船・工作物・構築物について」の問題改善に向けての取り組みの活動とその進捗について報告

④「手賀沼における水面利用について」

⑤「豊かな手賀沼をめざすデジタル教材づくり事業」の進捗状況の報告

⑥その他活動の報告

以上について取り上げ、特に②報告で、ごく最近の手賀沼に「ヒメガマ」↓「マコモ」↓「ヨシ」の順に生育域・生育の量にこの数年の内かなり衰退が進み、特に「ヒメガマ」が極端に減少し、壊滅に近い様相を呈し、このままでは悲惨な結末の到来が危惧され、この原因の早急な分析・そして対応策が急務であることを報告した。その間の「手賀沼内・南側」に広く繁茂していた「ハス」の突然の消滅も見逃すことはできない。原因の特定に向け行政の積極的な取り組みが急務であると、強く要望したい。

今号では、続いて本年1、2月分を報告する。

### 1. 「豊かな手賀沼をめざすデジタル教材づくり事業」について

昨年度に続いて進められている事業について、その制作目的や内容の概要は以前に発行済会報に報告済なので、ご参照いただきたいが、その後、各団体の作品も手直し作業等実施中で間もなく完成を迎えることに成った。「我孫子の文化を守る会」の作品「手賀沼に集った文化人」は、美崎会長の手により鋭意制作中で、細かな詰めを残し間もなく完成に近づいている。

また、昨年度までに完成ならびに本年度制作中の作品(全17)の活用について、柏市・図書館幹部ならびに同・学校教育指導関連課との会議を重ねる他、我孫子市については、同・教育相談センターとの会議も実施を重ねており、各方面から大きな関心と期待が寄せられていることも、このプロジェクトの重要さを物語るものである。

なお、作品の活用方法・公開の実施については、それぞれの著作権の扱いなど、微妙な問題もあつて、諸々が検討中である。

### 2. 「手賀沼の水の水質調査」について

既報にて、報告した本件は、手賀沼に流入している河川河口付近などを主体に「美手連」メンバー・我孫子市手賀沼課職員によつて継続されている。さらに、前述の「手賀沼船上調査」によつて、目視・確認された「特定外来ならびに在来水生植物の生育域・繁茂実態報告」にある様に、急速な「手賀沼に生育する植物」変化(在来水生植物の衰退や消滅の進行と特定外来水生植物の繁茂)が進むこの実態は、継続中の「手賀沼の水の水質調査」によつても、本その原因は判明に至らない。

なお、これに関連して、去る1月16日に「水の館研修室」において「手賀沼流域フォーラム実行委員会」が「手賀沼の水の残留農薬分析結果を受けての勉強会」講師・小倉久子氏(千葉県環境研究センター・元センター長・美手連顧問)を開催した。

私は、本稿冒頭部分と重複するが、「手賀沼」に起こっている「この重大と思われる実態を『単なる変化』とのみ捉え、問題点として正面から取り上げないことは、『現実からの逃避』であつて、将来いや現在にも多大な不安を覚えざるを得ない。これは『何かこの自然に大きな変化が既に進行中で、その「ブラックボックス」が、ごく近い将来に予測できない事態を引き起こす源「ブラックボックス」水質の実態になる。』と考えることは考え過ぎなのだろうか?」

「水質調査のデータを蓄積」し、それを多面から、叡知を集めて、「分析・解析」を進めることが「原因究明と対策の早期実施」に即繋がることに成ると考える。また、手賀沼に導水(注水)している「利根川の水の水質」にも目を配る必要は大きいと考える。



是非、行政がこの問題を取り上げ、将来に禍根を残すことの無いように、引率役として正面から取り組んでもらう役割を果たすことを切望する。

### 3.「手賀沼遊歩道周辺に見られる廃棄船・放置船・工作物・構築物について」の問題改善

この問題については、前号にて、昨年5月以降「千葉県柏土木事務所」に出向いて打ち合わせを2回持った結果、去る12月に『先ず「廃棄船」「放置船」の対策から、県として実施する』との回答を得ているので、「改善実行とその進捗」に注目していきたい。ただ2月26日現在、その現場を見る限りでは進捗は認められないが。

### (寄稿)

## 「中里薬師堂の秘仏御開帳」をみて

芦崎 敬己(会員)

### 中里薬師堂御開帳供養会

節分が過ぎ、前の週には雪の日もあったが、漸く晴れの日が続く、温かさが少しずつ感じられる陽気となった。二月一日(日)、我孫子の文化を守る会会員の海津さんから連絡があり、毎年出ているという幹事の戸田さんと一緒に、中里の薬師堂で開かれる御開帳供養会に参加した。

私は、二〇一五(平成二七)年にもこの御開帳を広報誌で知り見に行ったことがあったが、良く分からずじまいであった。

この日は湖北駅北口から幟が立つ道に沿って、風の中を歩いて薬師堂に向かった。早目に着き、海津さん戸田さんが合流した。

御開帳供養は、薬師堂の堂宇に檀家や地元の関係者が集まり、九時半から龍泉寺住職によりお経があげられた。

供養会は、堂宇の前のテントで中里区長の立原ひとみ氏の挨拶、来賓代表の星野市長の挨拶があった。市長から薬師堂は北向きの建立の珍しい建物で、市の文化財となつているとの話があった。来賓等の紹介があつ

たがセレモニーは直ぐに終わった。

その後、来場者相互の交歓会となり、隣に立つ中里薬師会館で軽食が振舞われた。

私は会館に上がる前に薬師堂内の秘仏等の写真を撮った。写真の中に、字体の面白い文字で彫刻された看板(扁額)の写真があった。しかし私には文字が読めなかった。

戸田さんと三人で薬師会館に上がり、温かいおでんをご馳走になりながら、お堂の入口に掲げてある扁額の四文字について戸田さんや、開帳供養会の受付の関係者に尋ねたが分からなかった。

会館の中に居合わせた諏訪神社の役員総代の藤根さんにお会いした。藤根さんとは、私が二〇二一年の将門プロジェクトで講演会の運営企画に携わった際に海津さんの紹介でお会いして以来であった。藤根さんにもお聞きしたが、扁額の彫刻をした彫師は知っているが、彫つてある文字は分からないとのことだった。少しもやもやした気持ちで帰宅した。

### 中里薬師堂とは

その後、「中里薬師堂」のことをインターネットや書物で調べてみた。

我孫子市教育委員会のホームページの「あびこ電脳考古博物館」によれば、中里地区の『薬師三尊は、本尊の薬師如来と脇侍の日光菩薩・月光菩薩のことをいい、人ひとを病氣から救うとされます。また十二神将は十二支と結びついて薬師如来を信じる人ひとを加護するとされます。中里薬師堂の薬師三尊および十二神将像の制作年代は、江戸時代後期と考えられます。中里薬師堂のように本尊と脇侍、十二神将がすべて揃って残されていることは大変珍しく、地域の人ひとによる篤い信仰と管理がなされてきたことを示します。現在、本尊は秘仏とされ、年に一度二月一日の御開帳に公開されています。(平成一八年市指定)』とある。

更に、我孫子市史研究センターの編著の「あびこの地名と歴史 ―わが町の字誌(あざし)―」によれば、

薬師三尊像と十二神将像



薬師様は菩薩のときに十二の大願を誓い、無明の病を治す法薬を与える現世利益のある医業の仏像です。江戸時代とある仏師が制作し、それ以来、数百年もの間、地元の方々に大切にされてきた仏像たちを今の時代に設置することなく、またこの先百年は今のお姿を保たれるような修復をして、後世に繋いでいきたいと思っております。

我孫子市中里区自治会

『北向薬師ともいわれる。旧宝蔵院境内に建立された仏像である。創建年代は明らかでないが、元禄時代(一六八八―一七〇四)にはすでに祀られていたと言う。薬師堂は、宝蔵院とは別の独立した堂宇として維持された。中尊の薬師は江戸後期の作とされる木造彩色の立像で、玉眼をはめている。像高51cm。両脇侍の日光、月光菩薩、十二神将が揃って保存されていたことは尊い。(略)』とある。

一方、中里薬師堂の右前面に建てられている市教育委員会が設置した説明板には、『薬師三尊像とは薬師如来と日光菩薩、月光菩薩の三尊をいいます。薬師如来は衆生を救うための十二の大願を立てて仏陀となりました。日光、月光菩薩は薬師如来を補佐する役割です。十二神将は薬師如来の十二の大願に対応して、薬師如来を信じる人々を守護するとされています。また、十二神将は薬師如来の分身とされたり、薬師如来の眷属(けんぞく)と位置づけられたりして、後になると、昼夜十二の時、十二の日、十二の月を司ると考えられ、十二支と結びつくようになりました。十二の神将の名称、形など一定していませんが、近世には十二支をあて、子神、丑神、寅神、卯神、辰神……とさ



れることが多くなります。我孫子市内では、十二神将像十二体が揃っているところはここだけであり、大変に貴重な例です。また、江戸時代半ば過ぎから定形化する十二神将の形であることから、江戸時代後半に中里新田開発後、中里地区の人々の信仰を集めて制作されたものと考えられます。中里薬師堂のように薬師三尊像と十二神将がそろって今まで伝来していることは、地域の人々に深く信仰され、管理されてきた証でもあります。現在薬師三尊像は厨子の中に秘仏として安置され、年一度の祭礼の時に開扉されています。



この薬師三尊像と十二神

将像は平成一八年三月に我孫子市指定文化財(八号有形文化財)に指定されました。』と明記されている。

また、二〇一九(平成三一年)一月二五日の教育委員会会の定例記者会見の資料によると、『略像が作られてから二〇〇年以上が経過し、持物や手足の損失、後年の誤った修理による頭部の入れ替わり、過剰な塗装および剥落などの破損が著しくなってきたことから、平成二七年度より、中里区を中心とした市民の寄付金、市の文化財保護補助金制度を活用し、毎年三休ずつ保存修理を行ってきました。(二七年度：薬師三尊像、二八年度：牛・申・酉神像、二九年度：丑・辰・巳神像、三〇年度：子・卯・未神像)今回の開帳では、三尊像及び修復完了の十二神将像九体(子・丑・卯・辰・巳・馬・未・申・酉)を見ることが出来ます。』とあり、五年間を掛けて十五体の像の修理が行われてきた経緯がある。

### 中里薬師堂の意味

私流に簡単にまとめると、中里薬師堂は、創建年は

不明だが、江戸時代後期には建てられた仏教上の建物で、薬師三尊像・十二神将像の十五体からなる彩色された木造の仏像が安置されている。三尊像の中央に立つ尊像(中尊)は、「薬師如来」で衆生(しゅじょう・生きとし生けるもの)の病と苦しみを癒し、救うとされる仏である。薬師信仰では眼病全般の治療を願ったといわれ、我孫子市内には他に三尊像と十二神将像が揃ったものが無く、非常に貴重な例である。

江戸時代には、地震・噴火・火災・水害から繋がる飢饉だけではなく、痘瘡(トウソウ・疱瘡・天然痘)や、麻疹(ハシカ)、風邪(インフルエンザ)、江戸時代末期の一八五八(安政五年)には、コレラ(ゴロリとも)等の感染症の流行により平穏な生活が破壊され、短期間に相当数の人命が失われた。人々が死や病の恐怖に對し薬師如来など仏や宗教にすがり、信仰心や仏像を大切にす行動が、科学の未発達な時代に浸透拡大したことは十分に理解できる。

薬師堂を建立することになった頃に、中里村に大きな災害や感染症の発生があったかどうかは、今後に更なる研究が待たれるところであるが、中里村の人々が薬師堂を建立し、明治政府の廃仏毀釈を始めとして想像される幾多の難関を乗り越え、十五体の像の大修理も経て、こんにちまで守り続けてきた努力に頭の下がる思いである。

### 扁額の文字の解説

秘仏御開帳から一週間が過ぎた二月一八日、諏訪神社の藤根さんから電話があり、薬師堂の扁額の文字と読みに関して調べ、その読みや意味が分かったとの連絡だった。

扁額の文字は、インターネットで調べ、「瑠璃光堂の四文字で、読みはルリコウドウと読むのではないかとのことだった。

「堂」は扁額の文字でそのまま分かるが、「光」に当たる扁額の文字が全く分からなかった。「瑠璃」に当たる文字は、言われてみれば成る程そうだと思った。

藤根さんは、確証を得られたわけではないと言って

いたが、私もインターネットのコトバンクの日本大百科全書やブリタニカ国際大百科事典等で調べてみた。

薬師如来は、「薬師瑠璃光如来」といい、大医王、医王善逝(ぜんぜい)とも呼ばれる。薬師如来が菩薩の修行時代に十二の本願を立て、それが達成されない限り仏にならないと誓った。その本願とは衆生の病気を治して災難を鎮め、苦しみから救い、薬師如来の名の起源と言うとあった。

更に、薬師如来は人々に現世の利益(りやく)を与えるという色彩が強いため、中国、日本では古来、薬師信仰が盛んであった。(中略)日本では法隆寺、薬師寺の薬師仏にみられるごとく造像が盛んに行われた。その形像は左手に薬壺(やくこ)を持つのを特徴とするが、一定していない。日光(にっこう)・月光(がっこう)菩薩を脇侍(きやうじ)とする。眷属(けんぞく)には護法神の十二神将を配する。『薬師如来瑞応伝ずいおうでん』には江戸時代の薬師信仰の盛んなさまをみる事ができる。民間では眼病などの治療に効験があると信じられている。今回の御開帳でも、祭壇に二つの「め」の字を向かい合わせた『向日絵馬』(むかいめえま)が飾られていた。

また、御開帳の当日、中里薬師会館に入ったが、入り口に「マツモトキヨシ」と寄付の文字があつて疑問を感じた。後日、調べると、中里地区の出身で千葉県議会議員に当選し、その後に松戸市長になった松本清氏が、老朽化で倒壊の恐れがある薬師堂の再建と会館の建設に寄付されたとのことだった。このエピソードでも地域の方々の熱い気持ちが感じられた。

藤根さんのお力を頂き、もやもややっていた扁額の四文字の案件が漸くすっきりした。

それにしても、創建当時の中里村には、何か眼の流行り病があつたのだろうか。

またまた、次の謎が深まってきた。



~~~~~

（連載第7回）

《世田谷の頃》の原田京平ファミリーを知る・

その4の1

補助線一本（鼎と白秋の仲）を加えて、
原田夫妻が、先ず「世田谷若林」に転居
した背景を考察する《

平林 清江（会員）

画家・歌人 原田京平とそのファミリーの
旧宅跡地現 加藤様邸ⅡKフラットⅡ東京都
世田谷区桜丘四一九三三六） 探訪・取材の記

山本鼎は、北原白秋・木下杢太郎らと、明治四十一年十二月「パンの会」を隅田河畔に興じた。明治の末期において、『方寸』の同人たちと詩人たちの会合、つまり、美術と文芸の交流から、新しい近代文芸を育てようとしたのが、この会の耽美主義的文芸運動であった。『中央公論』の編集者瀧田が、白秋・鼎・潤一郎の作品と一緒に掲載したのは、この三人が、明治末期から反自然主義の立場を鮮明にし、それぞれの美術・文芸運動に強力にかかわってきたからである。

資料紹介「瀧田哲太郎（樗陰）の志賀直哉宛書簡——『上智大学国文学論集』第48号 から

はじめに

原田京平ファミリーが、まず「世田谷若林」に転居した動機と背景を大胆に推理する

原田京平・睦夫妻が、昭和三年三月、それまで六年半居住していた千葉県我孫子町から、幼い二人の娘を伴って上京、先ず世田谷の「若林」と言うところに転居した。ここでは、その「動機」（上京を促した理由）と、まず「若林」に転居したことの背景」とを、大胆に推理してみようと思う。

原田夫妻は、先ず、世田谷では「若林」と言うところに住まいを持ったようだ。関連の資料（注1）からは、「昭和三年三月二十八日 我孫子町を離れ、上京。世

田谷若林に住む」とのみ記されており、番地が明記されていない。残念ながら、筆者にとつて「世田谷」はまったくの未知の土地であり、ましてや「若林」という土地のイメージがまったく湧かない。これはたいへん苦しいことである。そこで、いたしかたなく、あるいは、それ故に、何故「若林」なのかについて、大胆に推理を働かせようというのである。

また、「若林」の次に住まいを持った同じ世田谷区内の、当時の番地「世田ヶ谷五丁目二八四九番地（現世田谷区桜丘四一九三三六・加藤様邸）」については、「昭和五年三月世田ヶ谷五丁目に聚文画室を建て転居（注1）」と明記されている。

この旧番地は、歌人でもあった原田京平（和周）の遺歌集『雲の流れ』の奥付の表記からも明確に分かっていたので（注1）、世田谷文学館友の会の事務局の方々や会員の研究者の方々の協力により、この「聚文画室」の場所は、すでに確認・確定され、令和元年（二〇一九年）十月二十一日に、現所有者である加藤様邸ⅡKフラットの探訪・取材が実現し、オーナーの加藤充子（かとう みちこ）様にもお会いし、詳しくお話を聞くことができたのである。

その折りのお話しの内容については、《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る・その1》に「住んだのか、どのような暮らしがあったのか」にまとめ、会報「あひこの文化」192号・193号に掲載済みである。

興味のある方にご覧いただけたら幸いである。

さらに、本稿においては、世田谷の頃の原田京平の画家としての芸術活動として、「聖徳太子奉讃美術展覧会（しようたくたいしほうざんびじゆつてんらんかい）」（後述）への作品出品について、さらには、昭和六年から七年にかけての、夫妻同行の「朝鮮・満州への創作大旅行」についても、分かる限りで触れておきたいと考えている。

一、原田京平・睦夫妻が、我孫子町から上京した

「動機」（上京を促した理由）について考える

① 関東大震災後の我孫子町で

——上京前の京平のくらし

大正十二年三月には、「我孫子在住白樺派」（注2）の最後の一人、志賀直哉が、家族や我孫子の使用人を連れて京都に去った。大正七年、すでに武者小路実篤が去り、また、同十年には柳宗悦も去っており、京平が芸術的的刺激を受け、親密な交流をした「我孫子在住白樺派」の三人や、その関連の友人達（注2）が皆いなくなった我孫子町は、京平にとつて淋しい場所となったことであろう。やがて、それらの人々とは入れ替わりのように、大正十二年九月の関東大震災以後、当時上野から電車で一時間余の、我孫子町の原田夫妻を頼ってやって来た若い画家仲間たち——三岸好太郎、吉田節子（後の三岸節子）、鬼塚金華——などが、我孫子の「崖の風景」（注3）を盛んに描き、春陽会に出品し、入選を果たしていた。だが、京平は、それとは対照的に、日々沼に向き合い、沼と語り、そして沼の風景を描いたのである。

また、歌人としての京平は、師の窪田空穂や空穂系短歌雑誌の同人たちとの交友の、そうした賑わしい日々の合間にも、沼との対話をかさねていた京平の独白（独語・つぶやき）が、次の一首なのだと言えよう。

雨の沼眺めつ、居ればわがこゝろ
見つむるごとくわびしさかきむ

遺歌集「雲の流れ」より

ついに、その身の内の耐え難きほどのわびしさゆえに、身をもむ、沼辺の一本の葦になつてしまったようだ。

その他、大正十三年の歌には次のような二首が残されている。沼を臨む「丘・断崖」とは、京平にとり、友人の三岸や鬼塚たちのように描く対象というよりは、画作の悩みや病弱の身など、一人ものを思い、心情を吐露する場所であったのではないだろうか？

宿の灯の見えずなるまで来し丘の
盡きなむとして蛙の聞ゆ

丘のつくる断崖の上にうづくまり
ものを思へば蛙なきいづ

遺歌集「雲の流れ」より

② 画家としての京平に訪れた転機―沼を描いた 三点の作品から

だが、ちょうどこの頃、京平にある転機が訪れる。京平は大正九年の日本美術院洋画部解散に伴い、春陽会に参加し、その第一回展覧会(大正十二年)に「秋の日」を出品し入選、その後も毎年入選するようになり、その活躍が「人の目につきたし」たのである。

ここで、春陽会の初期における年代の、京平の代表作の一つに《沼》という作品があるが、この《沼》について解説をおきたい。

春陽会における京平の代表作《沼》について

美術評論家外山卯三郎(注4)は、この《沼》を以て画家原田京平の最も調子の高い傑出した作品だと評価している。また、「原田氏の芸術的な態度を評するならば、やはり印象主義の画家であつたといはねばならない。生れつき詩人的な天分を持つてゐたから、その作品にもたゞ単純な写生から出た一種の歌を持つてゐる」(原田和周氏遺作展 九日まで 数寄屋橋畔日動画廊「新聞切り抜き」)とも述べている。

同様の感想を述べている京平の友人の画家津田耕造は、「彼の詩的情操は歌に依つて得られていて、自由な境地を歩いていた」と述べているが、これは、「詩的情操は、歌人としての京平により多く現れているが、彼の絵画にはまだ充分に現れていない」という意味であつたようである。早世の京平の絵画作品には詩的情操が充分表現されておらず、そのことがまた、京平の画家としての悩みになつていたのではないだろうか。しかし、美術評論家の外山は、この点について長期的な視野を以て見抜き、評価していたと思われる。

大正十五年の第四回春陽会展覧会に出品された《沼》の原画は、残念ながら所在不明のようであるが、どのような作品であつたのか、ということがわかる資料が残されている。

残されていた《沼》に関する資料について

原田喬氏所蔵資料(現在は我孫子市白樺文学館に

寄贈済み)の中に、「手作り追悼集」と名付けられた和綴じの小さなノートがある。「手作り追悼集」という題名は、原田喬氏が「寄託資料リスト」(注5)の中であらかじめ、自ら名付けられたもので、元々このノートに貼られた題簽(たいせん)には何も書かれていない。

このノートには、夫京平の逝去後(昭和十一年一月逝去)、妻の睦が、生前の京平の画業について書かれた各種新聞記事や、展覧会に出品された作品を絵ハガキ(モノクロ)にし、貼付している。

ここに、《沼》の郵便絵ハガキ(モノクロ)が貼付されている。このハガキには睦の字と想像されるが、「原田和周遺作展出品 昭和11年7月」とあり、さらに「春陽会 第 一 回展覧会出品」と添えられている。そこで、空欄の箇所を筆者が、「大正期美術展覧会出品目録 大正11年(昭和5年) (国立国会図書館蔵・東京都現代美術館蔵)で確認したところ、《沼》の絵は、春陽会第四回展覧会(大正15年・1926年)に、原田聚文の名前(雅号)で出品されていることが分かった。また、「原田和周遺作展」とは、昭和十一年七月、銀座日動画廊で遺作五十余点を陳列したことを指すと思われる。なお、この時代に重なって見えるのが、原田の日本美術院時代からの師山本鼎(やまもと かなえ)(後述)が言うところの、「我孫子時代であつたと思われる」

「而して其の成績が人の目につき出したのは、所謂彼れの我孫子時代である。我孫子沼(筆者注・手賀沼のこと)の近くに、原田君は七年間の病養生活をやつた。寝て居る程の病人でないで、環境の景物を描きつづけたのである。」

〈原田君の画業「雲の流れ」収載
山本鼎による序文から

特筆すべき京平の二作品《春沼》・《冬され》について

原田京平・睦夫妻が、我孫子町の手賀沼畔に居住(大正十年十月(昭和三年三月)した大正十五年頃、師の山本鼎が言うところの「環境の景物」、我孫子の風景を題材としたと推察される作品《沼》であるが、ほぼ、同

時期にやはり、手賀沼の風景を描いたと考えられる作品に、《春沼》(油絵)、《冬され》(素描・乾墨画か?)の二点がある。

美術評論家外山卯三郎の評論の中では、《春沼》と《冬され》については触れられていないが、原田京平の画業のなかで、特筆すべき作品だと言わなければならぬ。

その理由は、これら二作品は、大正十五年に開催された「第一回聖徳太子奉讃美術展覧会」に出品された作品であるからである。

上京への強力なスプリングボード、 「聖徳太子奉讃美術展覧会」とは

画家としての原田京平の業績について調べている過程で、大正の後期から昭和の初めにかけて、「聖徳太子奉讃美術展覧会」という美術展が、東京と大阪で、計二回開催されたことを知った。何か聞き慣れない名前の美術展であることよ、という印象を持ったが、当時「我が国において初めての、また、唯一の総合美術展覧会」という意義を有する美術展覧会であつた、ということが分かってきたのである。

ここで、「第一回聖徳太子奉讃美術展覧会」について、簡単に記しておきたいと思う。

なお、第一回及び第二回の同展覧会と原田京平との関わりについては、今後、会報「あびこの文化」に掲載予定の、《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る》の5 原田京平も出品した「聖徳太子奉讃美術展覧会」にかかわる資料解説の中で詳しく述べているので、こ

一読いただけたら幸いである。

さて、同展覧会は、「西洋画・日本画」「彫塑彫刻」「工芸」の三部門から構成されており、その会期は、大正15(1926年)年5月1日より同年6月10日までの41日間、主催は「財団法人聖徳太子奉讃会」という団体(総裁久邇宮邦彦王殿下・会長細川護立・副会長渋谷栄一)で、開催場所は、大正15年5月に新設されたばかりの東京都美術館(東京市下谷区上野公園 現東京都美術館)、後援は東京府であつた。

京平、西洋画の部の委員に任せられ、作品二点を出品する

原田京平は聖徳太子奉讃会の総裁の台命を受け、西洋画の部の委員に任せられ、作品を二点出品した。その出品作品は無鑑査とされ、同会編さん・作製の図録には、その二作品《春沼》と《冬され》の写真版が掲載された。この折りの出品者名は「原田聚文」である。

京平の我孫子在住期の大正十五年に開催された第一回展覧会で、二作品はいずれも我孫子の風景を描いたものと推察される。同展覧会の委員に任せられ、作品を出品するということは、当時、大変な名誉に与ったということになったようである。

さらに、同展覧会は、五年毎に開催されることになつており、このことが、原田夫妻にとり、上京への、強力なスプリングボードになったのではないかと推察される。実際、第二回の同展覧会も昭和五年に開催され、京平はこのときも《川そひの村》という作品を出品したようである。

同展覧会について調査を進める中で、美術史家の間でもあまり知られていない、あるいは、忘れられた美術展覧会という印象をもったが、現在、立派な三冊の図録が東京都現代美術館に所蔵されている。

三冊の図録とは、「第一回聖徳太子奉讃美術展覧会 西洋画之部」、「第一回聖徳太子奉讃美術展覧会 日本画之部」、そして、「第一回聖徳太子奉讃美術展覧会 彫刻之部」である。題名が、それぞれの背表紙に書かれてあつたと記憶するが、奉讃会副会長の渋沢栄一の手になるものであつたかと記憶している。

これらの図録には、同美術展覧会の出品作品の写真版(モノクロ・カラー)が貼付されてあるので、どのような作品であつたのか窺い知ることができるが、東京都現代美術館によると、同館には現在、西洋画の原画の所蔵は一点も無いとのことであつた。

また、余談であるが、同展の調査で何回か、現代美術館に通つたが、とうとう図録は板目紙(ボール紙)で補強されてしまったことが、今でも懐かしく、また可

笑しく思い出される。それでも、閲覧可能だと思つたので、興味の有る方は是非一度御覧いただきたい。

(東京都現代美術館所蔵 江東区三好4-1-1 03-5245-4111 資料データ:請求記号K70 21/771/1-1 聖徳太子奉讃美術展覧会図録 第一回・聖徳太子奉讃会編纂 東京巧芸社1926 (大正15) 06-2488・東京府美術館

③ 歌人としての京平に訪れた転機

―『白樺』『榎の木』の会員たちとの交流

大正十四年頃と思われるが京平は、空穂系短歌雑誌『白樺』(しらがし)の同人となり、師の窪田空穂や同会の歌友らとの交友も始まる。ちなみに、この会の主宰であり、編集者である医者の家は、東京本郷にあつた。

さらに、同十五年(昭和元年)には、東京小石川区雑司ヶ谷町八八(現文京区)に住む空穂を中心に、早稲田大学国文科に、短歌雑誌『榎の木』(つきのき)が創設され、その会員たちとの交流も始まり、同人ではないが、画家である京平は、同誌の表紙画を描くことでもかわりを持つようになったと推察される。未だ調査の途中で、ここに詳しく記すことが出来ないのが残念であるが、空穂の家での『榎の木』の会合では、京平は色々な歌人や文学者との交流を持っていたようである。ひとり抱え込むような画作の悩みを慰め支えたのは、やはり短歌を創ることであり、同じ志の師や歌友たちとの交流であつたのではないか?

そうではあつても、この頃は、原田夫妻の師・山本鼎が言うように、画家としても歌人としても、その活躍ぶりが「人の目につきたし」(前述)たのである。

夫妻にとつて現実味を帯びる「上京」について

こうした状況になると、我孫子町に住むよりも、上京し東京で暮らす方が、何かと都合が良いということになる。また、画家としても、歌人としても世間から認められたことによる、精神的な高まりもあつて、心機一転、「上京」は、夫妻にとり現実味を帯びたものと

なつたのではないか?

もともと、我孫子に転居する以前は、東京目黒にあつた京平と睦である。東京の便利さ・その良さは当然知っているから、上京ということに対してはあまり抵抗が無かつたのではないだろうか。

さらに、学齢に達した長女麻那(まな・染織家 国画会会員)に、芸術家夫妻が思い描く理想の教育(自由で創造力を育む学校教育)を受けさせたい、という思いから、東京にある適切な学校選びということも、夫妻の重要な課題となつたことと思われる。次の項では、実際麻那が受けた学校教育と「赤井米吉」という教育者との出会いについて記しておきたい。

なお、歌人としての原田京平を軸として、師の空穂や歌友らとの交流を取り上げた小論に、次の二点があるので、「一読願えたらありがたく思う。」「窪田空穂」、「空穂系短歌雑誌」などの注釈もこちらに記してあるので、ご参照ください。

《世田谷の頃の原田京平ファミリーを知る・その3

空穂(うづぼ)先生が、聚文画室に和周を見舞つた日のこと― 歌の師空穂と和周のたどつた道》

会報「あびこの文化」第196・197号掲載済み

「手賀沼畔居の画家・歌人原田和周(聚文)と、彼が招いた歌人たち」

(窪田空穂・染谷進・宇都野研・割田斧二・宇野某:大正十四年・昭和二年)平林キヨ(我孫子の文化四十一年の歩み)収載

令和三年四月二十六日 我孫子の文化を守る会 発行者 美崎大洋) *市販図書

④ 麻那に理想の教育

(自由で創造力を育む教育)を―

長女麻那が受けた学校教育と、教育者赤井米吉との出会い

原田麻那の著書「原田麻那の染織 所収の略年譜からは、麻那は、小学校から高等女学校まで、一貫して

「明星学園」に学び、昭和14（1939）年に卒業していることがわかる。その「明星学園」の教育について、ホームページから引用してみた。

「明星学園は、1924年（大正13）年5月15日、赤井米吉、照井猪一郎をはじめとする4人の創立同人により小学校を開設した。当時の管理主義的画一教育から子どもたちを解放し、子どもの個性や自主・自立を尊重することを目的に、建学の教育理念として「個性尊重・自主自立・自由平等」を掲げ、児童数21名、教員数4名でスタートした。

小学校開設のとき入学した最上級生の卒業にあわせ、1928年（昭和3年）に中学部（旧制中学校）と女学部（旧制高等女学校）を開設し、園長赤井米吉の招聘に応え上田八一郎が中部部長（校長）として着任した。これら中学部、女学部は、第二次大戦後の学制改革のなかで、男女共学の中学校と高等学校に改組され、今日ある小学校・中学校・高等学校の体制になり、12年一貫教育を整えた。」（明星学園の創立経緯・教育理念・沿革）

赤井米吉先生との出会い

「この子はなにかがありそうで」

その明星学園で麻那はどのような学園生活を過ごしたのであろうか？麻那自身の言葉からうかがってみたい。

「私の卒業した明星学園は、大正時代に成城学園から離れて、新しく赤井米吉先生とその他の先生が作られた自由主義の学校で、朗らかがモットーであった。クラス中で演劇をしたり、私が先生にお願いして油絵の美術部を作ったり、ときどき皆で散歩の時間をねだって井の頭の田園を歩いたり、学校は楽しい所であった。」

（原田麻那の染織）原田麻那著 求龍堂
1998年5月26日発行）

「当時の校長は赤井米吉という教育家で、麻那をつかまえて「この子はなにかがありそうで、教えるのがたのしみじゃ」といった。

麻那はこの言葉を支えとして生きてきたようなものだった。現代の尺度から見れば、自分は馬鹿で、無能で、なまけもので、無器用で、どうしようもない女だと思う。しかし、赤井米吉という一人の人格が、自分の中に「なにか」をみつめてくれている。

その「なにか」は祖先が血の底流に残していつてくれたものだと思う。自分がその「なにか」をひきずり出し、形をあたえてゆくことは運命的な義務なのではないかと思う。」

〈おんなの辞典12 原田麻那〉

『芸術生活』昭和39年12月号所収）

「母を見て育った私は、女でも何かを身につけて生活出来なければと子供の頃から考えていた。しかし、好きな画では自活するほどの力量はないとあきらめて、ただ好きなだけの『万葉集』を松村英一に、暉峻康隆（てるおか やすたか）の芭蕉、蕪村を、ルネッサンスを富永惣一に、中島健蔵からフランス文学を、はては哲学を清水幾太郎から、田中俊雄から民芸の話等々、当時の私には何の足しにもならないであろう講義をとりとめもなく三年間聴きまくった。

卒業して十年も何もしないのでは「せつかくの教育者に合わす顔がないではないか」とひそかに思い悩み続けていたことであつた。そして、「何も出来ないなら死んでしまえ」と私は私に命じてみた。私は死にたくはないのでデレタラントを止め、柳悦孝先生の弟子になつて染織を習い始めたのは昭和二十三年、二十四歳のときのことであつた。（同）

原田麻那、柳先生と出会い、染織家として

国画会の重鎮となる

昭和二十三（1948）年九月一日、麻那が柳悦孝（やなぎ よしたか）先生に弟子入りした第一日である。柳先生は糸車を作つて待つてくれたという。

柳先生からは、草木染及び化学染料による手染手織の染織工芸を学び、翌年（昭和二十四年・1949年）、国画会工芸部（注6）に出品し、入選。同二十七（1952）年には、国画会新人賞を受賞し、会友になり、同三十三（1958）年には、同会会員となる。

独自のスタイル（のしめ）の着物を製作し、題材は万葉集、雅楽、西域、俳句、海、雪など自然のイメージを抽象化したものが多い。麻那が自身で述べていることだが、「麻那がその作品のイメージを考える時、それまで学び培って来たさまざまなことが、磁石に吸い寄せられる砂のように、一点に集まってくるのを感じた」とのことであるが、このことは、麻那と麻那の作品を語るとき、重要なポイントと言ふべき点である。

昭和四十一（1966）年には、茨城県笠間市芸術村に工房兼アトリエを建築し転居、ここで母睦とともに創作に励み、国画会の重鎮として活躍する。着物の代表作には、〈故地〉・〈異域〉・〈月は東・落暉〉（いずれも、京都国立近代美術館買上）などがある。

【注釈】

（注1）関連の資料：「原田睦 八十八歳自選画集」

（著者原田睦 発行原田麻那 昭和五十九年九月二十日刊行）所収の〈原田睦年譜〉に、「昭和三年三月二十八日、我孫子町を離れ、上京。世田谷若林に住む。」の記述がある

奥付の表記から明確に分かつていた：歌人でもあった京平の遺歌集「雲の流れ」の、奥付に書かれた住所表記「東京市世田谷区世田谷五ノ二八四九」、現在の「世田谷区桜丘4-9-36」にたどり着いた。その際、世田谷文学館友の会会員のきむら けん氏、木村 孝氏の御助言をいただいた。会報「あびこの文化」197号の末尾に「奥付」の画像の掲載あり。

聚文画室（しゅうぶんがしつ）：「原田睦 八十八歳自選画集」所収の〈原田睦年譜〉の昭和五年の記述に、「三月世田谷五丁目に聚文画室を建て転居」とある。

こは、現在のオーナー加藤充子氏の加藤邸のある場所「聚文」という雅号はこの頃京平が使用したもので、聖徳太子奉讃美術展覧会に出品した際用いた雅号である。夫妻にとつて特別な意味を持った雅号であったようだ。

(注2)我孫子在住白樺派:雑誌『白樺』を中心に展開された白樺派は、大正デモクラシーの時代の新しい文芸活動。当時、白樺派の中心人物の志賀直哉・武者小路実篤・柳宗悦らが我孫子に住み、多くの同人や信奉者が来訪した。美しい手賀沼の自然環境から創作活動のエネルギーを受けて、彼らは我孫子で多くのすぐれた作品を創り上げた。また、文学にとどまらず絵画や彫刻などについてもその時代が一番良い芸術を先取りし、ロダンや印象派の絵画などを積極的に紹介した。当時の文化をリードした白樺派が、手賀沼のほとりで育まれ、大きく発展したことは、我孫子の素晴らしい文化的財産である。

パンフレット『我孫子市白樺文学館』発行年不詳

その関連の友人達:「大正期 我孫子在住の作家たち」(兵藤純二『我孫子市史研究』第四巻 一九七九年三月 我孫子市教育委員会発行)の中の、「志賀直哉日記往来表(上京含まず)」は、大正十一年一月から同十二年三月までにおける志賀の「日記」から、志賀を訪問した人々の往来回数を書いたものであり、これを参照すると、格段に往来回数が多い小説家や画家は、瀧井孝作、橋本基、原田京平・睦夫妻、高橋勝也、中勘助、木下検二、児玉素行の八人である。これら八人の人々は、我孫子に居住しながら、我孫子在住期の志賀直哉と交友をした人々であり、その中でも原田夫妻との往来回数は、特に多い。

原田京平・睦夫妻が我孫子町にやって来たのは、大正十一年十月である。この頃志賀は、代表作であり唯一の長編小説である『暗夜行路 前篇』を執筆、雑誌『改造』に連載中であった。翌大正十一年からは後篇に着手し、執筆意欲満々であったが、年末から執筆に行き

詰まり自信喪失状態に陥った。そのような志賀を慕って近くに住み、志賀を側面から支えたのがこれら八人の小説家(小説家志望の人も含む)や画家であった。大正十二年三月、志賀が我孫子を去ると、これらの人々も我孫子を離れ、原田夫妻だけが、昭和三年三月上旬するまで、志賀邸の母屋に住んだ。

(注3)我孫子の崖の風景

①大正十二年九月一日の関東大震災後、一、二年の間三岸は節子夫人や俣野第四郎、小林喜一郎、鬼塚金華、岡田七蔵等の友人と折々手賀沼の畔の我孫子に写生に出かけている。

我孫子には早くから志賀直哉が住み、志賀がこの年の三月に京都に転居した後の本宅に原田恭平(聚文春陽会出品者)が住み、後ろの小高い山の離れに中出三也・甲斐仁代夫妻が住んでいた。彼らの先輩にあたる裕伊之助(はざま いのすけ)の我孫子風景による受賞(大正七年第五回二科展の二科賞)に刺激されて、当時我孫子は青年画家のスケッチ地として賑わったのであるが、ここに描いた風景を三岸は、翌年、翌々年の春陽会に出品している。

「三岸好太郎―昭和洋画史への序章―」(匠秀夫北海道立三岸好太郎美術館 昭和43年11月1日22p)

②大正13年女子美術学校の卒業を控えた節子は、卒業制作のために何度も我孫子へやって来た。崖を描くためである。我孫子の手賀沼のそばに、志賀直哉の別荘があり、それを春陽会の人(注:原田京平のこと)が借りていて、その裏の書斎には中出三也と甲斐仁代が住んでいた。卒業の前年(大正12年)の12月31日、好太郎に誘われて中出の所に来た。手賀沼のそばまで来た時、立ち止まり好太郎は節子に「結婚したい」と言ったという。翌3月、節子は首席で卒業し、その9月に二人は結婚、好太郎21歳、節子19歳であった。

何度も我孫子に来て描かれた一つが『風景』(1920年代・油彩・キャンバス・一宮市三岸節子記念美術館蔵)である。ここには崖と家が描かれている。このとき

節子は何枚かの我孫子風景を描いており、此の絵とは別の『風景』を大正14年、第三回春陽会展(1925.3上野竹之台陳列館)に出品して、女性初の入選作家となる。画家の中川一政や木村莊八などから大変な好評を得ている。

好太郎の『我孫子風景』も節子が描いたこれらの絵も、描かれた場所は「楚人冠公園下に居住していた」江間の渡守で、志賀直哉家の小間使いをしていた宇田川三之助(三造)の場所であるという。赤茶けた崖の一部はコンクリート製の石垣となり、周囲の田圃は舗装道路や住宅地に代わってしまった。そこには、大きな井戸がのこされており、まわりには篠竹が生い茂っている。絵にある家屋は、風呂場と井戸が一つ屋根になつてゐる茅葺きと、母屋の茅葺きであつたという。

節子と好太郎の結婚生活は好太郎の死によつてわずか10年であつたが、我孫子での作品が女流画家として、一つの出発点となつたのではなからうか。節子は三人の子を育てながら、「芸術家の魂」を好太郎から得た遺産として、男性中心の当時の画壇に女流画家の道を自ら開き、粘り強く逞しく生きた。そして画家として大成し、平成11年4月、94歳の生涯を閉じた。

〈三岸節子の我孫子風景(品田制子氏執筆「我孫子市史研究センター会報」52号掲載 平成18年6月25日発行)〉

三岸節子(みぎし せつこ):1905年(明治38)、現在の愛知県一宮市に生まれる。旧姓、吉田。愛知淑徳高等女学校(現・愛知淑徳高校)を卒業後、21年(大正10)に上京。翌年、女子美術学校(現・女子美術大学)2年に編入、岡田三郎助に師事する。24年、女子美術学校を首席で卒業し、三岸好太郎と結婚。好太郎の春陽会第一回展(の初入選に伴い、第3回展に節子も初出品。30年(昭和5)に好太郎が独立美術協会の創立会員として参加すると、32年以降は同展に出品するようになった。34年に好太郎が急逝する。その後は独立美術協会に集った女性画家たちと、女紳会、

七彩会などを結成して活躍、戦後は女流画家協会の創立に発起人として参加した。また新制作展などにも出品した。54年に渡仏し、一年半にわたり滞在、スペイン、イタリアへも旅する。61年に大磯に転居、99年(平成11)、同地にて没す。《自画像》は、春陽会第3回展に初入選した作品で、画家としての出発点となった特筆すべき1点。

図録「春陽会誕生100年 それぞれの闘い」岸田劉生、中川一政から岡鹿之助(二編集・制作 東京アーシオンギャラリー他 発行日 2023年9月16日

発行者 庄司美樹)

(注4) 外山卯三郎(とやま うさぶろう)：明治三十六(1903)年一月、昭和五十五(1980)年三月。和歌山県生まれ。画家、美術評論家、詩論家。大正十一年北海道帝国大学予科入学。北海道大学美術クラブ黒百合会会展、道展などにダイズムの作品を発表。大正十五年同大学卒業。昭和二年頃から、美術評論活動を始める。戦後は女子美術大学講師、武蔵野音楽大学教授を務める。著書に「ヨネ・ノグチ研究」全二巻がある。享年七十七歳。

「20世紀物故美術者事典」

(注5) 「寄託資料リスト」：東日本大震災直前の平成二十三(2011)年三月六日、原田喬氏が初めて我孫子を訪ねられた際、それまで我孫子市白樺文学館に寄託された、原田京平とその家族の作品及び書簡などの資料について、「寄託資料リスト」及び「解説書」を作成するよう仰せつかった。

「寄託資料リスト」は、平成二十三年五月に作業を終了し、同月、原田喬氏と我孫子市白樺文学館に贈呈。また、二年半ほどの調査期間の後にまとめたのが解説書「原田京平研究 原田喬氏所蔵資料から見た画家・歌人原田京平の芸術活動と交友」(私家版 筆者執筆 平成二十五(2013)年十一月二十日)である。これについても、原田喬氏に贈呈し、さらに要請のあった我孫子市白樺文学館へも贈呈した。

(注6) 国画会工芸部：大正7(1918)年、文展から自由な制作と発表の場を求めて京都の青年日本画家小野竹喬、土田麦僊らは在野としての「国画創作協会」をおこし、その定期展の通称を「国展」とした。

同協会は大正14(1925)年、土田と交流のあった梅原龍三郎を招き、第一部を日本画部とし、第二部を洋画部(現絵画部)とした。昭和3(1928)年「国画創作協会」の解散に伴い、第二部は名称を「国画会」として独立し、定期展の通称「国展」もそのまま継承した。草創期の国画会には、諸外国の作家たちの作品を特別陳列し、世に広く紹介、海外作品に触れることが少なかった。当時の美術界には有益な企画を行っていた。マチス、ボナール、ロダン、ブルデル、バーナード・リーチ、ルオー、モネ、ルノワール、シャガール、ピカソ、セザンヌ、等。

「絵画部」に「版画部」、「彫刻部」、「工芸部」、「写真部」を加え、五部による美術団体として、毎年春期に「美術の春・国展」を開催。創立精神「創作の自由」をモットーに、個性を重視し多様化する表現様式と新しい世代にも呼応する美術団体。平成18(2006)年には開催80回を迎えた。

平成19年から国立新美術館を会場としている。「工芸部の近代日本美術の先達には、富本憲吉、柳宗悦、柳悦孝、バーナード・リーチらがある。

(パンフレット「美術の春・国展」第87回 2013.5.1～5.31 国立新美術館)から引用

~~~~~ (プロジェクト報告) ~~~~~

百人一首を楽しむ会(番外)

美崎 大洋

今月の歌(恋の歌その(26))

嘆けとて月やは物を思はする

かこ顔なるわが涙かな (86)

【現代語訳】

「嘆け」と言つて、月が私を物思いにふけらせようとするのだろうか? いや、そうではない。(恋の悩みだとい

うのに)月のせいだとばかりに流れる私の涙なのだよ。

【語句】

【嘆けとて】とては「〜と言つて」という意味の格助詞で、「月が私に嘆けと言つて」という意味。月を人のように表す擬人法が使われている。【月やはものを】やはは反語を表す複合の係助詞です。下の「する」が結びで、「〜するのだろうか? いやそうではない」と訳す。【思はする】「する」は使役の助動詞「す」の連体形で「やは」の結び。「月が物思いにふけらせるのだろうか? いやそうではない」という意味になる。【かこ顔なる】「かこ顔」は「かこつ」からきた言葉で「かこつける」、つまり他人(こゝでは月)のせいにする、という意味。

【作者】

西行法師(さいぎょうほうし)。1118～1190)俗名を佐藤義清(のりきよ)。鳥羽上皇に北面の武士として仕えていたが、23歳の時に家庭と職を捨てて出家、京都・嵯峨野あたりに庵をかまえ西行と号した。出家後



は、陸奥(東北地方)や四国・中国などを旅して数々の歌を詠み、漂泊の歌人として知られる。歌集に「山家集」があり、また彼の一生は「西行物語」に詳しく語られている。

【鑑賞】

この歌は「月前の恋」という題を与えられて詠んだ題詠である。「月を見ると、自然に涙が流れてくる。恋の

悩みなのに月が嘆けと言っているようだ。そんな月のせいにして、うらめしげに流れる我が涙だなあ」というほどの意味だろうか。

昔から、月は物思いにふけらせ、悲しみにくれさせてしまう何かがあるようで、日本ではお月見という行事がある一方で、月を見ることは忌むべきことだとの考え方もあった。

英語でも「ルナティック」は「気がふれた」という意味もあるし、満月になると変身するオオカミ男の伝説もある。時には青く輝き、怪しい雰囲気をかもし出す月放浪を続けた西行は、そんな月を愛して月の歌を多く詠んだ。鳥羽天皇の北面の武士（天皇を護る近衛兵）というエリート職を捨て、俗世を捨てた自分。それと日の光を見ることなく、いつも暗い夜空に輝いている月に相通じるものを感じたのかも知れない。

鳥羽天皇に出家を願ひ出る時には、こんな歌を詠んでいる。

をしむとてをしまれぬべきこの世かは
身をすてこそ身をもたすけめ

西行は坊さんだが、月と花を好んで歌に詠み、恋歌が多いことも知られる。旅人の自由な心がそうさせたのか、闊達で大胆な歌が多く、現代でも通じるようなさつぱりとした心が感じられる。

願わくば花の下にて春死なむ

その如月の望月（もちづき）のころ

花見にと群れつつ人々来るのみぞ

あたら桜のとがにはありける

このようにひきこまれるような魅力があり、非常に人気の高い大歌人だ。

西行は諸国を旅した人だが、陸奥を旅した時にこんな歌を詠んでいる。

あはれいかに 草葉の露のこぼるらん

秋風立ちぬ 宮城野の原

宮城野は、現在の宮城県仙台市の仙台駅の東から仙台港へ通じる市の北東部にあたる。

関連狂歌など

何ゆへか西行ほどの強勇が

月の影にてしほしとなく

あきれつつ月夜に釜をぬかれたる

たはけ面なるわが所帯かな

あがけとて酒やは物に狂はする

酔ひ泣き顔の我が涙かな

かこち顔見かねて定家集に入れ

今月の歌（恋の歌その(27)

夜もすがら もの思ふ頃は 明けやらで

ねやのひまさへ つれなかりけり (85)

【現代語訳】

（い）としい人を想つて夜通しもの思いに沈むこの頃、夜がなかなか明けないので、（いつまでも明け方の光が射し込まない）寝室の隙間さえも、つれなく冷たいものを感じるのだよ。

【語句】

【夜もすがら】副詞で「夜通し」とか「一晩中」という意味。【もの思ふ頃は】「もの思ふ」は、恋歌によく出てくるが、つれない人を想つて思い悩むという意味。「頃は」には「この頃」とか「夜ごと夜ごと」という意味があるので、全体で「毎晩つれない人のことを想つて」という意味になる。【明けやらで】「夜が明けきらないで」の意味。下二段動詞「明く」の連用形「明け」に、補助動詞で「すつかりし終える」という意味の「やる」の未然形がつき、さらに打消しの接続助詞「で」が結びついたもの。【ねやのひまさへ】「ねや（閨）は「寝室」のことで、「ひま」は「隙間」を意味する。「さへ」は「〜でさえ」のことで、ここでは「つれない想い人だけでなく寝室の隙間さえもが」という意味となる。【つれなかりけり】「冷たい」とか「無情だ」とかいう意味で、現代語とそう変わらない。

「つれなし」という形容詞の連用形に、詠嘆の助動詞「けり」がついた形。

【作者】

俊恵（しゅんえ、永久元年（1113）〜建久2年（1191）頃？）は、平安時代末期の僧・歌人。父は源俊頼。母は橘敦隆の娘。早くに東大寺の僧となり、俊恵法師とも呼ばれる。



十七歳のときに父と死別してから、約二十年もの間、作歌活動から遠ざかっていた。現在、俊恵作と伝えられている歌は千百首あまりであるが、その多くは四十歳以降に詠まれたものである。白川の自坊を「歌林苑」と名付け、そこに藤原清輔・源頼政・殷富門院大輔など多くの歌人を集めてさかんに歌会・歌合を開催し、衰えつつあった当時の歌壇に大きな刺激を与えた。鴨長明の師で、その歌論は『無名抄』などにもみえる。風景と心情が重なり合った象徴的な美の世界や、余情を重んじて、多くを語らない中世的なものの静かさが漂う世界を、和歌のうえで表現しようとした。同じく幽玄の美を著そうとした藤原俊成とは異なる幽玄を確立したといえる。

関連狂歌など

夜もすがら物思ふ頃は明けやらで
あらうものなら世界くらやみ

傾城(けいせん)にふられ煙草の火は消えて

闇のひまさつれなかりけり

「傾城(けいせん)」「けいせい」が変化した語は、一目見ただけで一国の城と交換してもよいと思うほどの美女、あるいは遊女

物思ふころや隣の餅の音

(参考文献)

淡光ムック 百人一首入門 有吉保・神作光一 監修

(淡光社)

インターネット百人一首各種投稿文

あびこだより111号

演題 「ネット社会と新聞力

―新聞の危機といわれる中で―

関口 一郎(会員)

概要

われわれの家庭には必ずといっていいほど、生まれたときから新聞はあったので、それが普通と思っていました。小学校の上級生になると新聞を読むことが一人前に近づいたことで、小説などへの導入口になり、社会の動向を知るはじめてでした。その新聞もラジオやテレビの登場で話題になりましたが、補完関係をうまく保ちながら部数を伸ばしてきました。

ところがこの数年新聞は確実に減ってきているといえます。朝日新聞の場合、かつて800万部台あった部数が14年間で400万部に、読売新聞も一千万台から600万部台といえます(日本新聞協会調べ)。他社もおしなべて同じ傾向にあります。

これがスマートフォン等の普及によることは誰もが知っていて、身の回りを見ても50歳代以下の家庭では新聞を必要としないところが多いです。

ここから波及される課題は多いです。新聞の購読層の最も多いといわれる800万人の団塊の世代は、20

25年には後期高齢者になります。世界に冠たる日本の新聞取次店制度も経営が厳しいです。それにもまして大手新聞社の力が弱くなることによる海外取材等の課題も喫緊のことです。こうしたことの解決は容易でないが、現実問題としてわれわれも認識し、話し合うことも必要ではないでしょうか

「放談くらぶ」で関口氏が講演

日時 4月20日(土) 14時〜16時

会場 市民プラザ会議室1

演題 「ネット社会と新聞力

―新聞の危機といわれる中で―

放談くらぶ報告

「稲村雑談―我孫子の文化を守る会へ―

に参加して

池末 成明

◇はじめに

2024年2月24日(土)午後2時、あびこ市民プラザ会議室1で開催された、我孫子の文化を守る会放談くらぶ「稲村雑談―我孫子の文化を守る会へ―」を受講しました。講師は、我孫子市教育委員会の主任学芸員で、以前は白樺文学館の館員であった稲村隆氏でした。講演の題名である稲村雑談は、志賀直哉が広津和郎らと熱海稲村で雑談した速記録の名称で、この中に我孫子の記録があるとの話が講演の冒頭にありました。粋な命名ではありませんか!

講演は、地域博物館の存在意義と地域貢献がテーマで、鳥取県と山梨県的美術館を事例としつつ、白樺文学館の在り方を来場者にも問うことが趣旨だったと思います。講演を拝聴し、改めて民営時代の皆様と中興の祖としての稲村氏の白樺文学館への貢献と覚悟に感銘を受けました。白樺文学館を活用した柳兼子の研究者の講演を実現したい一市民として、白樺文学館の存在意義と地域貢献を考察してこなかったことに気づく機会となりました。

◇鳥取県と山梨県のケーススタディ

2025年春に鳥取県倉吉市に開館予定の県立美術館は、ポップアートのアンディー・ウォーホルの「キャンベルのスープ」を4554万円、「ブリロの箱」5個を3億円で購入しました。補足しますと、ポップアートとは、大量生産される生活用品などを表現する芸術で、ブリロはアメリカの「たわし」のブランド名です。フィギアメーカーの工場進出をきっかけにポップカルチャを美術館の収集の軸とし、「優れた作品を所蔵していれば、県民だけでなく国内外からも多くの来場者が見込まれ、美術館の存在感を増すことができる。また他の美術館から『貸してほしい』といった声がかかり、代わりはこちらが望む作品を貸してもらえることができるとの期待が県にはあります。一見陳腐なこの二作品の購入に県民から批判が出ていますが、「ウォーホルの作品の購入が報道により注目を集めたことを広告料に換算すれば購入額に見合う価値となった」という稲村隆氏のご見解は納得できるご意見で、開館後の美術館の将来は明るいでしょう。

ルイヴィトンには、ウォーホルに啓発されて大量生産しても自社製品をラグジュアリーブランド(高級品)として成功すると確信し、世界的に展開しました。この事例は、鳥取県に限らず白樺文学館も地域の新たな事業創出で貢献する可能性を示唆しています。

山梨県ではフランスのミレーの「種をまく人」と「夕暮れに羊を連れて帰る羊飼ひ」を1億8200万円で落札、当初は高額購入の批判を受けましたが、その後も県はミレーの作品の購入を継続、今では「ミレーの美術館」として国内外の愛好家から親しまれ、山梨県に農業従事者が多いことの影響が批判もなく、内外から高い評価も受けているとの紹介がありました。

2009年にノーベル経済学賞を受賞した米国のオストロムのコモンズは、山梨県のブドウ園の共同経営のフイルドスタデイの影響が大きいという不確かな記憶があります。コモンズの研究者との共同イベントは「落穂拾い」に代表される貧困とその救済を扱ったミレーとの親和性も高く、地域社会だけでなく、世界に

貢献するかもしれません。また、この時代のフランスのサロン文学、美術や音楽の学際的な研究に関心が深い芸術家は、共同イベントなどの開催を歓迎するでしょう。同様に大正昭和の民藝や文化人との交流拠点として我孫子もまた彼らの興味をひく聖地にするこ

◇白樺文学館

白樺文学館は貴重な所蔵品は多いけれども、白樺派の「我孫子時代の原稿・書簡・美術作品・写真など」文学館の所蔵品のものはずかであるという話は衝撃でした。このような視点で白樺文学館を楽しんだことがなかったからです。志賀直哉の『城の崎にて』は、高校の国語の授業で読みましたが、その原稿が我孫子で書かれたことは知らず、その原稿が白樺文学館にな

いということを残念に思う稲村氏に共感しました。一方で、稲村氏の信念の軸があつたからこそ、原田恭平の作品や志賀直哉の娘の嫁ぎ先の山田家から寄贈されたコレクションの所蔵品の意義が顕現したのでしよう。

◇原田恭平

原田のことは全く知りませんでした。原田は我孫子を拠点に短歌や油彩画・水墨画を創作し、我孫子に在住した白樺派と交流があり、近年、その業績の研究が進められているとのこと。今後の白樺文学館を考えるにあたって、重要な人物だとわかりました。また原田の故郷、浜松の白樺文学館の所蔵品の貸し出しの話題は、鳥取県のウオーホルの貸し出しの計画の話題とあわせて重要でしょう。原田の作品の修復の前後の稲村氏の写真での紹介は、「ここまで変わるか」と驚きました。所蔵品の保管と陳列の設備とともに収集品の修復も課題だとわかる例でした。

稲村氏は、原田の作品が描かれたと推定される場所の写真を紹介しましたが、確実な場所の特定は愛好家の足による調査が鍵でしょう。特定した場所に碑を建てることも質疑応答で話題になりましたが、グーグルマップと連携した位置情報でのプッシュも可能と思

います。こうしたアプリケーションは、総務省や千葉県などのベンチャー支援事業の活用で、展開できるかもしれません。

◇柳兼子

白樺文学館を知ったのは我孫子市に移転した2004年で、何より印象に残ったのは柳兼子でした。2011年の夏、バーナードリーチが、福岡県大牟田市の明德という祖父が経営する料亭のホタテの一品を好んだと知りました。祖父は味噌入りカレーを夏休みに遊びに行った私によく食べさせてくれました。リーチは1917年我孫子に住み、大牟田には戦後に訪れましたが、白樺味噌カレーとの因果関係は不明のままで、このことが兼子の関心深めました。また昨年、国立音大名誉教授の小林緑先生が著作『ポリーニに魅せられて』、ポリーニと兼子の共通点や我孫子と縁がある森鷗外が『棕鳥通信』でポリーニに触れたこと、白樺文学館の住所が先生と同じ名前であることに縁を感じます。

講演では、『大正時代の文化人の集う別荘地』『民藝』などの視点から白樺文学館の課題と方向性についても触れました。前述の所蔵品の収集の方針に限らず、イベントの開催でも同じ課題があつて、「我孫子の近現代の文化史の中で我孫子にとつての白樺派と白樺文学館」という視点が重要とわかりました。予算や公的施設であることの運用上の制約は無論ですが、関係者とのネットワーク（人、所蔵品（物）、事業（金）のフランスと融合も重要でしょう。柳兼子に関するイベントを開催したい一市民として、どのように「作文」して、多くの方に聞いていただくか、皆さまのご指導をお願いします。

◇おわりに

ミレーの時代の欧州の『民藝』の学際的な研究者でもあるハーブ奏者の中村愛（めぐみ）氏とピアノリストの山田舞依氏は、夏目漱石が『夢十夜 第六夜夢想』の運慶の仏像を引き合いに、「バッハは演奏者が掘り出せば

掘り出すほど、隠れた構造が見える」と語っていました。稲村氏も語っていましたが、我孫子の文化を運慶のように掘り出してきた我孫子の文化を守る会の皆さんの努力は大変だったろうと思います。皆様の今後のますますのご活躍をお祈り申し上げます。

おわりに講演の内容をすべて整理できませんでしたが、ことをお詫びします。



「牧場の朝」の作詞者探し

美崎 大洋

今年の一月九日付けの「福島民報」1面に次の記事が載った。タイトルは「牧場の朝」（1月9日）

「古里の音色だ。鏡石町では正午と午後5時、唱歌『牧場の朝』のチャイムが流れ、町民に時を告げる。町内の岩瀬牧場の情景を歌った。一人の医師の探究によって歌詞の舞台が特定された秘話が眠っている▼1932（昭和7）年に文部省の唱歌に制定され、全国で広く歌い継がれてきた。作詞者も、モデルとなった場所も分からぬままに。半世紀後、郷土研究家でもあった町内の診療所長の最上寛は岩瀬牧場が歌われたらしいとの話に興味を持つ。須賀川市博物館に所蔵されていた資料から、文筆家杉村楚人冠「そんかん」が牧場を訪れ、歌詞の元になった文章を書いていたと突き止めた▼大ニュースに地元は沸き立ち、記念の歌碑が40年前に鳥見山公園に建立された。歌詞と楽譜が刻まれている。だが、月日は無情とも言える。その存在を知らない世代が増えてきた。新しい住民も多く、口ずさめない人も少なくない▼町民顕彰の前文にもなっている歌を後世に継ぐため、地域を挙げた取り組みが始まった。町は歴史をひもといた動画や冊子を作り発信していく。♪ただ一面に立ちこめた牧場の朝霧の海」。町の自然と風土をたたえるメロディーに、輝く陽光が再び当たり始める。」

『福島民報』をネットで調べると「福島民報は明治25年8月1日に創刊し、福島県で一番読まれている新聞です。東日本大震災以降、県民の思いや復興に向けて歩む本県の姿を国内外に発信し続けています。そうした取り組みが評価され、平成24年には編集部門、平成26年には編集部門、経営、事業部門で新聞協会賞を受賞しました。」とある。

冒頭の「牧場の朝」の文章は同紙の1面のコラム「あぶくま抄」の内容である。

「ただ一面に立ちこめた 牧場の朝の霧の海」で始まる「牧場の朝」と杉村楚人冠については我孫子では以前から折に触れ語られている。楚人冠は我孫子ゆかりの有名人ということもあり、当会でも「史跡文学散歩」でバスを仕立てて新聞文中にある鏡石町の岩瀬牧場を訪れたことがある。また千代田線の北小金駅の下り列車の発車メロディに「牧場の朝」が使われていたこともあり、我孫子周辺の住人には馴染み深いこのメロディの放送は数年前に廃止された。

地元の福島県鏡石町は当時、町おこしの一環で楚人冠についても盛んにPRしたようだ。岩瀬牧場で作ったヨーグルトに「楚人冠ヨーグルト」の名称を付け、現在も販売している。

我孫子に住んでから同窓のある先輩の方から勧められて楚人冠に興味を持ち色々勉強した。その中で何度か発表したこともある内容であるが、新聞記事中の「歌詞の舞台が特定された秘話」について改めて書いてみたい。



「牧場の朝」の作詞者探し

昭和四十八年六月十八日NHK第一ラジオ放送「趣味の手帖」午前6時15分〜30分で、作曲家平井康三郎氏（元芸大教授 日本音楽著作権協会理事）が「不明な小学唱歌の作詞者・作曲者・モデルになった処はどこでしょうか」と放送され、『故郷』『牧場の朝』『春の小

川』などを特に挙げた。これらの歌はいわゆる「文部省唱歌」と言われるもので、明治から昭和にかけて文部省が編纂した尋常小学校、高等小学校、国民学校及び学制改革後の小学校の唱歌、芸能科音楽の教科書に掲載された楽曲の総称である。当時、文部省は作詞者・作曲者に高額な報酬を払い、名前は一切出さず、また作者本人も口外しないという契約を交わした。「国」が作った歌であるということ強調したかったのだとも言われる。そもそも合議制で編纂されたため、個人の著作物とするのは無理があり、また時代の変化にともない、歌詞が変更されることも多かった。

一方、昭和二十二年に制定された学校教育法に基づく検定教科書の時代になってから著作者を明らかにしなければならなくなった。しかし著作者が判明しても根拠が弱いものも少なくないため、個々の作詞・作曲者を出さず「文部省唱歌」とだけ表記している教科書・歌集もある。

「牧場の朝」については戦後の昭和二十二年発行の教科書から作曲者が船橋栄吉と明示されたのとは対照的に、不明だった歌の舞台と作詞者探しが始まった。

前述「趣味の手帖」放送の6年前に福島県鏡石町診療所長として赴任した医師の最上寛氏はこの作詞者探し話に興味を持ち、作詞者探しを始めた。ある時「旧制安積中学時代に国語の教科書で、楚人冠の書いた岩瀬牧場の情景を習ったことがあり、その時楚人冠が岩瀬牧場に来泊して文章を書き、唱歌も書いたと担



任教師から聞いたことがある」という人が現われたが、その教科書は既に存在していなかった。しかし歌詞の中に出て来る「鐘が鳴る鳴るカンカン」との「鐘」がいわゆる「特別な」岩瀬牧場の鐘と一致したのである。あきらめかけていたころ、同県須賀川市立図書館で虫干し作業中偶然、くだんの「中学国文教科書 第二」（大正七年一月、光風館書店刊）が見つかった。昭和四十八年十一月のことである。

岩瀬牧場では明治四十年に入りオランダより乳牛13頭（オランダホルスタイン）が輸入されたが、その際同時にオランダと日本の友好の印として鐘が贈られていた。明治四十三年十二月にこの牧場を訪問した楚人冠は紀行文『牧場の晩』の書き出しで「ぢゃんぢゃんぢゃんと、半鐘の音が霜夜に冴えて、如何にも気たゝましく聞える。僕はがばと起きた。外面はまだ暗い。……」と、このオランダの鐘の音を明確に表現している。この文章は、単に印象が似ているばかりか歌詞と同じ言葉が多数使われているのに驚く。



タイトルの「牧場の朝」をはじめ「一面に」「牧場の夢は聊（いささ）か覚めた」「唯（ただ）一息に」「幾棟か」「勇ましげな」「鐘の鳴る」「小屋を」などである。状況的証拠が次々と集まった。詰めとして、杉村の署名がある草稿や日記の記述などが求められた。しかし決定的証拠は結局見つからなかった。

事態は最終段階に来て膠着する。そこで日本音楽著作権協会理事であった平井康三郎の責任による判定が下された。「実感に満ちた描写で、現実の鐘の音を耳にした人でなくては書けない詩であり、決して机上の作文ではあり得ないと確信する」としたのである。

29

52. 3.19 週刊読売

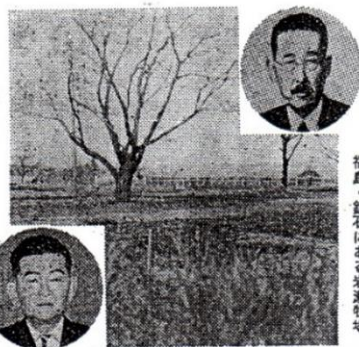


『牧場の朝』はオヤジの作詞じゃない

石町の医師・最上寛さん(右)

『牧場の朝』は、楚人冠の息子さん(左)が父の作品であるはずがないと断定しており、これは歌詞とつくりの『霧の海』風景。旧文部省唱歌は作詞者が不明のものが多く、今回「福島民報」が楚人冠説を打ち出した根拠は、福島県岩瀬郡鏡

杉村楚人冠(右)と杉村武氏(左)の調査活動による。こめた。『牧場の朝』の霧の海…昭和七年から歌いつがれていく。作詞者は、明治の文人・杉村楚人冠である。最近「福島民報」紙が断定した。ところが、楚人冠の息さんは「父の作品であるはずがない」と断定しており、これは歌詞とつくりの『霧の海』風景。旧文部省唱歌は作詞者が不明のものが多く、今回「福島民報」が楚人冠説を打ち出した根拠は、福島県岩瀬郡鏡



「福島民報」は楚人冠と断定するが息子は

①この年、楚人冠はこの大ニニスを追って牧場を訪れた。そのとき、楚人冠は「牧場の一夜」(楚人冠日記)という紀行文を残しているが、これが「牧場の朝」の歌詞とじつによく似ている。

②楚人冠の名前はないが、大正七年発行の「中学国文教科書」の中に、やはり内容が

ところが、昭和五十二年、著作権継承者であった楚人冠の四男で元朝日新聞記者の杉村武が異論を唱えたからややこしい。「カンカンやピピピ」などの擬音語は父が使ったとは思えないなどと反論(週刊読売記事参照)。が、擬音については、「ぢやんぢやん」が前述紀行文の「牧場の暁」の冒頭に使用されている実例から四男の否定説は崩れた。さらに翻つて四男は「そう言えば、父が酔ったときに『牧場の朝』を口ずさんだことがあった」と逆の証言に転じ、一気に平井裁定で落着

疑問も続出するが傍証も

その後、「戦前、新聞記者という一民間人がいきなり文部省唱歌の作者になるのは不自然ではないか」との疑問が出たが、この疑問に答える証拠が出たのである。楚人冠は先の「中学国文教科書」にも筆者名を記さなかったように、教科書類に自らの名前が載るのを嫌い、教育関係の仕事に携わったことを履歴から外す傾向があった。このため後世、特に戦後、その部分が記録に残りにくかったが、実は大正十年から唱歌制定の年を挟んで昭和十年まで十四年間に文部省臨時国語調査委員を務めていた事実が浮かび上がった。

当時、教科書に文章が掲載される条件として、文豪といわれた大作家や詩人を除くと、まず教科書編集委員などのメンバーとなり、文部省に「認定」される必要があった。楚人冠も委員だったからこそ紀行文が掲載に至った。唱歌の作詞者としてもまた十分な有資格者だったのである。

しかし、さらに疑問はあった。確かに楚人冠は評論や随筆の分野では著名だったが、そもそも作詞をする人物であつたかどうかである。これには「楚人冠全集」第十二巻で「…はやり唄のひとつも歌へぬ私が『唄』などとは、大それた話と笑はるゝか知れぬが、世間はよくしたもので、私が歌はないでも、これに節をつけて、ちゃんと歌って下さる方が出て来た。」と本人が昭和十三年四月に記しているのである。

加えて紛れもない証拠が発掘された。「日本ロータリーの歌」を本名杉村広太郎の名で作詞しており、プライベート盤ながらビクターからレコード化もされていたのである。当時、楚人冠が「牧場の朝」の作詞者であることは厳に伏せられていたはずだが、一部関係者には知られていたのか、唱歌での実績が買われたとしか考えられない時期、つまり「牧場の朝」が学校で歌われ始めた二年後の昭和十年に「日本ロータリーの歌」が制定されていた。作曲が吉住小三郎で東京音楽学校邦楽科講師(後に教授)。つまり船橋栄吉の同僚だったのである。ここでも船橋—杉村のライン上に不思議な縁が絡む。船橋の恩師、世界的ソプラノの三浦環(た

まき)が大正三年、ロンドンで衝撃的デビューを飾った際、特派員だった杉村が記事の特電として日本に書き送り、「牧場の朝」で船橋と杉村がコンビを組み、「日本ロータリーの歌」では、船橋の同僚吉住と杉村が共同作業をしたのである(その後、この日本ロータリーの歌は著作権問題が起り使用中止となる)。

フゴースップの歌

—東京ロータリークラブ用—

一

旅は道づれ、余は情け、
なさは人の為ならず。

余は明鏡のやどす影、
うつす形を偽らず。

わがほゝゑめば、影も笑む。

二

徳は孤ならず、隣あり、
天人ともにこれに和す。

世は日月の照らすごと、
影も光も依怙ならず。

わが行く道は、人も行く。

ホームラン級の「決定打」こそないものの細かい安打の積み重ねにより「牧場の朝」の楚人冠作詞は揺るがないものになった。

しかしである。現在でもNHKや日本著作権協会(JASRAC)は今なお、頑なに「牧場の朝」の作詞欄に「文部省唱歌」と記している。

「著作者が判明しても根拠が弱いものも少なくないため、個々の作詞・作曲者を出さず『文部省唱歌』とだけ表記している(前述)典型的な例のひとつと言える。

我孫子市民のひとりとして非常に残念である。

(参考)

神戸新聞Web News「牧場の朝」と船橋栄吉 万能音楽家の足跡など

第四十五回短歌の会（最終採択の二首）

一月二十三日実施

鯉鈍踏む祖母の背に負われ見し
景色納戸も障子も回り回りぬ

昔より優しと言われし能登の人
なにゆえ地震雨雪止まぬ

村上 智雅子

木守り柿食べつくしたとひよどりは
高く鳴きゆく夕暮れの空

暮れの空カラスが「アー」と鳴いてゆく
今年終われどいくさは続く

納見 美恵子

洪柿の皮くるくると剥く父の
無骨な手にも秋の陽だまり

あの人のあのナンバーの車くる
逢へる予感し待つ交差点

佐々木 侑

突然のアラートに凍るテレビ画面
能登を揺るがす元旦の午後

会報紙配る門扉にしつかりと
ダウン着たかの春待つコブシ

芦崎 敬己

口数の少ないところが長所だと
言われた昔を君は信じぬ

嘘をつく時のわが顔分かつとの
妻の指摘に疑心暗鬼よ

美崎 大洋

亡き夫を語れる君の面やさし
木洩れびのやふにわが身を包む

八十年ひたむきに生きてまだ解けぬ
藤村操を思ふこのごろ

伊奈野 道子

文学掲示板

令和六年五月展示作品（文学の広場）

（過去の短歌会の作品から選んでいます）

桜まだ散りきらぬ日に人の世の
ひとつの別れと重なりてある

我孫子市 伊奈野 道子

「311 さんいちいち」聞けば脳裏によみがえる
大川小の廃墟に立ちし日

我孫子市 美崎 大洋

ひと刻の夕映はるばる風紋を
画（えが）きつかの間消えゆく湖の面

我孫子市 大島 光子

資源ごみに百科事典の積まれおり
時の移りの身にしむる朝

柏市 納見 美恵子

忸怩（じくじ）たる思ひ駆らるる「今は我慢」
努力の選手よ泣きたくば泣け

我孫子市 佐々木 侑

河津はや葉桜となりしばしの間
染井吉野は膨らみ行きぬ

我孫子市 村上 智雅子

当会の行事予定

□第141回史跡文学散歩

「布佐の桜と新田次郎の足跡を訪ねる」

新田次郎が5年間我孫子で過ごした布佐気象台記
念公園の両脇には大きな桜がたおやかに咲きます。

また宮の森公園では200mにおよぶ桜並木が見事
で、将来性のある我孫子の桜名所として注目されてい
ます。歩きの苦手な方でも、車で行きますので是非ご
参加ください。（先着20名、（車で参加できる方歓迎）

日時 3月25日（月）10時～14時半、我孫子駅北口
ふれあい広場集合（布佐方面の方は10時30分気象
台記念公園から合流）

申込み 村上（090-53333-2855）3月20日締切
参加費 800円 昼食代 1,200円

□「放談くらぶ」

日時 4月20日（土）14時～16時

会場 市民プラザ会議室1

講師 関口 一郎氏（会員）

演題 「ネット社会と新聞力」

—新聞の危機といわれる中で—

参加費、会員無料、非会員三〇〇円

申し込みTEL(7185)0675 佐々木まで

(12ページ「あびこ」より「参照ください」)

□プロジェクト「短歌の会」

第四十六回短歌の会

日時 3月26日（火）13時30分

場所 けやきプラザ10階小会議室

□プロジェクト「巨木、銘木をめぐる会」

2月25日（日）の「巨木プロジェクト」は雨のため中止

日時 4月21日（日）9時 我孫子駅改札口集合

観察先 上野公園・東京芸術大学構内

連絡先 佐々木 〇九〇—二五九四—〇四二五

編集後記

かつての部下（女性）から昨年10月「日展に
入選しました」とメールがあった。初応募で初入選とい
う。現在主婦である彼女は昔、同じ部署でプログラマー
として一時、大型コンピュータのプログラムを書いていた。
プログラマーとしての適性はそれほどなかったよう短期
間で別の部署に異動になった▼システムやプログラムの仕
事には物事を論理的に考える力が求められる一方、絵
画や芸術には独創力や感性が求められるという違いが
ある。彼女の外にも何人かの新人が不適性という判断で
他の部署に移っていた。彼女の場合はたまたまプログラマ
ーとしての適性はなかったが、絵画・芸術の素質、才能が
あったということであろう▼ところで「コンピュータ・イコ
ンピュータ」という間違った概念が世間にはある。確かにコ
ンピュータの設計や構築、いわゆるハードの分野では理系
の専門知識が必要だが、ソフトなどのアプリケーション開
発と呼ばれる分野は理系である必要はない。人材獲得に
おいても旧態依然とした採用基準に拘らない基準が必要だ▼経営や行政にも科学や技術が必須な今日、「文
系・理系の区分け」を廃止する時期が来ている。（美崎）